語彙を豊かにする主題単元学習の展開（二）

――「なぜ、人が恋しいのか。」の場合――

加藤宏文

はじめに

学習者の具体的な「表現語彙」は、「理解」での「印象語」[注1]に深く関る。それに聴き耳を立て、それと有機的な体系をなす「彙」をも、どうとらえ育むか。「語彙を豊かにする」学習を求めてきて[注2]、学習語彙の「彙」としての「系統性」の探究を展望する。それは、技能学習と価値学習との統合を目指す「主題単元学習」[注3]に見合い、学習語彙の、量にはとどまらない、質としての修得を、常に指向する。

すると、教材への、学習者と私との「主題意識」は、どの語句に注目するところから、深化の道をたどるか。「印象語」からの出発である。たとえば、形容詞を中心とするか。その一語は、一般的には、どのような意味と理解されているか。さらには、その教材のその場で、作者（筆者）の「主題意識」と直結して、どのような意味を実は担っているか。また、他のどのような語彙との有機的な関わりでこそ、価値を輝かせているか。そう求める。

さて、二年目の学園で、新入生と、これから三年間を共にすることになった。本年度は、うち、「国語Ⅰ」（A＝現代＝二単位＝二クラス、B＝古典＝三単位＝三クラス）を担当している。本単元は、〈表1〉の②に位置する。そこでは、「人恋しさ」の価値を学び合いたい。教科書には、太宰治の『津軽』を初め三つの小説がある。それぞれに、深い「人恋しさ」が、語られている。導かれ、主題意識に密着して、「語彙を豊かに」したい。

〈表 1〉

「国語Ⅰ」（現代・二単位・二クラス）学習年間計画　使用教科書　第一学習社「国語一」（三訂版）

	単元主題	理解	表現	語彙	方法	教科書所収教材（○印実践）
1	ほら、何かが聞こえてくる。	さがす	スピーチ　一つの文、一つの語	複合動詞と名詞	ノートの工夫	○(1)矢野健太郎「癖ある馬に能あり」 ○(2)谷川俊太郎「二十億光年の孤独」 ○(3)広中平祐「『自分』という未知な存在」 ○(4)芥川龍之介「羅生門」 (5)北杜夫「百蛾譜」
②	なぜ、人が恋しいのか。	確かめる	暗誦　印象語を深め、ふくらませる。	形容詞	グループ学習	○(1)井伏鱒二「おふくろ」 ○(2)志賀直哉「網走まで」 ○(3)会田綱雄「伝説」 ○(4)太宰治「津軽」 (5)高村光太郎「樹下の二人」
3	もっと手紙を書こう。	深める	手紙文　二百字文	副詞	相互批判	(1)大岡信「ことばの力」 (2)与謝野昌子「その子二十」他 (3)ラ・ロシュフコー他（アフォリズム） (4)藤原英司「ナチュラリストの手紙」
4	ちょっと立ち止まってみよう。	ひねる	レポート　段落をつける	動詞	カード法	(1)別役実「座ること」 (2)草野心平「富士山」 (3)山本健吉「歳時記について」（俳壇から） (4)
5	文明は、一つではない。	つくる	論文　起承転結	接続詞	討論	(1)中村雄二郎「人間の時間」 (2)山崎正和「水の東西」 (3)福井謙一「科学と人間の未来」 (4)林京子「ギャマン・ビードロ」

そこで、本単元は、(1)『羅生門』からは、何が聞こえてきたのか。(2) 形容詞は、どこまで愛を語れるのか。(3) 「人恋しさ」の普遍的な価値を確かめ深める。(4) 形容詞は、どのように「人恋しさ」を語るのか。(5) 「人恋しさ」を、どのように学んできたのか。—の五つの柱をなす。詳しくは、〈表2〉の通りである。本稿は、中で、(4)・(5) に関る第七時から第一一時での学習報告である。形容詞語彙は、系統性をも射程に、豊かになったか。

一

第七時の小主題は、「人恋しさは、どう表現されるのか。—場面の中での形容詞の意味を読む。—」である。太宰治の『津軽』学習の始まりである。(1) 範読（加藤）に聴きひたる。(2) 二人の心情をよく表わしている形容詞を、一つずつ書き抜く。(3) それぞれの形容詞を含む文を、前後の文とともに、三文続けて書き抜く。

〈表 2〉

主題単元「なぜ、人が恋しいのか。」の学習内容（〈表現〉番号は、学年通算。）

時	目標	教材	内容
1	○ 前単元での到達点を再確認し、本単元の入り口をさぐる。	(1) 『羅生門』を、「二十億光年の孤独」と比較した七人の表現 (2) リチャード・バック作・五木寛之訳『かもめのジョナサン』の冒頭の一節	(1) 七人の表現には、どんな問題が提起されているか、比較し整理をする。 (2) 『かもめのジョナサン』の冒頭の一節を読み、味わい、(A) 書き出しだけで予想されること (B) 一節全体の範読に聴きひたって考えたことを、記述する。→〈表現9〉
2	○ 表現語彙としての形容詞の力に注目する。	(1) 三人の〈表現9〉 (2) 井伏鱒二『おふくろ』	(1) スピーチに聴きひたり、要点を記録する。 (2) 相互の愛のよく表れている文を書き抜く。 (3) (2) を説明し、一つの形容詞で表現する。→〈表現10〉

3	○ 形容詞はどこまで愛を語れるかを、確かめる。	(1)〈表現10〉 (2)井伏鱒二『おふくろ』	(1)〈表現10〉への相互批判を記述する。 (2)グループ内での発表と討議〈表現11〉 (3)(1)・(2)から得たものを、まとめる。→〈表現11〉
4	○ 形容詞の表現力の具体例を理解する。	(1)〈表現10・11〉の例 (2)野口シカさんの手紙 (3)中原中也「子守歌よ」	(1)相互批判やグループ討議で明らかになった点を、整理する。 (2)二つの教材を、形容詞を入り口に説明する。→〈表現12〉
5	○ 一つの文から、心境と状況とを読み進める。	(1)〈表現12〉の例 (2)志賀直哉『網走まで』	(1)〈表現12〉への相互批評を記述する。 『網走まで』の範読に聴きひたり、一文を選ぶ。 (2)一文を入り口に、心境と状況とを説明する。 (3)〈表現13〉
6	○ 主人公の心境と「女の人」の境遇とを想像する。	(1)志賀直哉『網走まで』	(1)書き出しの一文に紹介された二人の文面から、心境を想像し、記述する。 (2)「女の人」の境遇を想像し、はがきの文面を再現する。〈表現14〉
⑦	○ 場面の中での形容詞の意味を読む。	(1)〈表現14〉の例 (2)太宰治『津軽』	(1)二人の心境を表す形容詞を一つずつとらえる。 (2)それぞれの形容詞に込められている二人の心情を説明する。〈表現15〉
⑧	○ 五つの場面での形容詞を確かめる。	(1)太宰治『津軽』 (2)国語辞典	(1)改めて五つの場面の範読に聴きひたる。 (2)選んだ一つの場面での形容詞の一般的な意味を、国語辞典で調べ、記述しておく。

⑨ ⑩	○ 場面の中で、支える語彙の意味を確かめ、形容詞の理解を深める。	(1) 支える語彙五つの一般的意味とここでの意味とを、確かめ記述する。 (2) 支えられる形容詞の一般的意味とここでの意味とを、確かめ記述する。〈表現16〉
⑪	○ 単元主題と学習方法についてまとめる。	(1) 場面での心情を通し、作品についての考えをまとめ記述する。〈表現17〉 (2) グループ学習と「形容詞」の方法を省みる。〈表現18〉

(3)(2)(1) 太宰治『津軽』
国語辞典
角川　類語新辞典

(2)(1) 太宰治『津軽』
〈表現16〉

(4) 二人の心情を説明する。—その成果は、《表現15》に定着された。《Aさんの表現15》（　(4)　に当たる。）

Aさんは、たけさんに関る心情を、形容詞「弱い」に、「わたし」に関る心情を、形容詞㋑「ありがたい」に、それぞれ鋭く聴き取る。

(4) たけさんの心情。久しぶりに出会った人（他人）には、会った瞬間に、「元気だった?」などという何か会話をかわす。しかし、たけは、何も言わず関係ないことを、弱い口調でいった。この弱いは㋺本当は、たけ自身の中では強いものだったと思う。喜びをおさえていたのだろう。／「わたし」の心情。本当は、一滴とも血のつながりがない。しかし、たけの娘との間には、きょうだいの様に、他人行儀がなかった。自分もたけの家族の一人なのだという喜びから、「ありがたい」という気持になったのだ。

〈私のひと言〉大切な二つの形容詞が、よく押えられていますね。㋑の形容詞には、謙虚で純粋な心がよく表われていますよね。㋺に、まことに鋭い洞察とその表現がありますね。「弱い」という一見何でもない形容詞が、ここでは、重い意味を担っていることがわかりますね。

一見平凡な形容詞が、対義語との対比を通し、場面の中で、「人恋しさ」の奥処に連なる。Aさんは、そこに鋭く聴き耳を立てて、その「印象語」を、すでに「彙」としての系統性の中でものにしようとしている。一地精査が、広がりをも生み、豊かさをも獲得する。

《B君の表現15》（　(4)に当たる。）

B君も、たけさんに関る心情を、形容詞㋑「うれしい」に、「わたし」に関る心情を、㋺「ありがたい」に、それぞれ鋭く聴き取る。

(4) たけさんの心情。たけもやっぱり、会いたかった。そして、本当の本当に再会することができて感激している。まさか、むこうから、会いに来てくれるとは、思っていなかったから。／「わたし」の心情。わたしにとってたけは母親がわり、いや、母親そのものだった。自分を育ててくれたたけだから…。たとえ遠く離れていようと、心と心は通い合っている。しかし、昔のことがなつかしく思われて、どうしても会いたい、会わなくてはならない（自分から）と思っている。

〈私のひと言〉㋑は、いろいろ言いかえられて、結果的には、（どうでも）「いい」に落ちついていますね。㋺からは、もう自分のことのみにとどまらずに、世間の人に向かってお説教さえしてみたくなるほど、たけさんのことを、感激の心で表現していますね。

「ありがたいのだか、㋩うれしいのだか、悲しいのだか、そんなことはどうでもいいじゃ、まあ、よく来たなあ、」――たけさんは、その心情を、こう表現している。B君の鋭い印象語としての把握に、私は、場面と文脈との中での㋑が、「梟」として、他の形容詞とも密接に関ることを指摘する。系統が意識される。

《C君の表現15》（（4）に当たる。）

C君は、たけさんに関る心情を、形容詞の「愛ごい」に、「わたし」に関る心情を、㋥「ない」に、それぞれ鋭く聴き取る。

(4) たけさんの心情。たけさんは修治とあえたのがうれしくてたまらないんだと思う。だけど、あまりにも久しぶりにあったものだから、何から話せばよいのかわからなくなり、あまり、うれしいんだよという気持を表に㋭出せなくなってしまったんだろう。／「わたし」の心情。会えると思うとうれしくてうれしくてたまらないということを、素直に表現していると思う。㋬人の不幸を喜んでまでうれしがるんだから、本当にうれしいんだなあと思う。

〈私のひと言〉㋑この放言は、実に素朴なひびきを持ってせまってきますね。㋺この「ない」は、助動詞ですよ。「いい」は形容詞です。これに食いついてみよう。㋩表面の「さりげない」その裏に、重い三十年の心が秘められているのですよね。㋬は、「腹痛」という生理的な次元のことですから、そう大げさに相手の犠牲のうえに成り立つというほどのことでもありませんね。そう言ってのけるほど、謙虚に「母なるもの」への感謝が表現されているのですよ。

ここでは、「梟」の系統性を求める視野の中に、方言や生活語をも引き入れることの意義を、学ぶことができる。また、品詞としての認識に、とりたて学習も可能である。

このように、学習者の《表現》と〈私のひと言〉との接点に導かれる。すると、ここには、語彙の系統性を求める二つの道が、見える。一つは、当該一語が孕み持つ意味の新鮮な領域への驚きを確かめることである。この「理解」（発見）は、類義語や対義語等への目くばりをも通し、自ら系統性を求めていく。二つは、当該一語を場面や文脈のなかで、外から支え、その意味の領域を決定する語彙の発見である。二つは、相俟ち、実の系統をなす。

そこで、このような縦と横との体系を求めた系統性を模索する

には、まずは、教材透視力が、鋭く磨かれたい。予め設定された年間主題単元学習の体系の中で、当該教材は、私たちのどのような「主題意識」の対象として価値を予期させるのか。また、同時に、その価値と直結したどのような語句を、学習者の「印象語彙」として予測もさせるのか。語彙の系統性を展望しての「語彙を豊かにする」学習は、二重の意味での教材透視力を求める。

二

「喧噪」から「寡黙」への変質。――状況のなかで、学習者は、このように見える。聴きひたると、「喧噪」がそうであった以上に、「寡黙」は、心底、人が恋しいのである。「恋しさ」は、一途に人を求めているのである。この「恋しさ」は、普遍的な価値をもつ。対象化されたならば、意欲をもって確かめ深め、さらには、つきぬけて生き抜くための「主題意識」（力）となる。意義は、深い。

第八時の小主題は、「人恋しさをどう表現するのか。―場面のなかでの形容詞の意味を考え始める。――」である。太宰治の『津軽』学習の深化である。(1) 五つの場面の範読（加藤）に聴きひたる。(2) 五つの場面一つずつの形容詞を確かめ、国語辞典で一般的な意味を調べ合う。(3) 選んだ一つの場面を、暗誦するほど何度も読み、形容詞の一般的意味とそこでの意味を比べ始める。――ここでは、指導された自律的学習の実現が、目指される。

小説『津軽』には、形容詞が多用されている。本単元ですでに学習してきた井伏鱒二の『おふくろ』、志賀直哉の『網走まで』と比べると、〈表3〉のようになる。圧倒的に形容詞型の文章ということができる。「語彙を豊かにする主題単元学習の展開」の中で、太宰治の『津軽』は、このように透視することによって、形容詞語彙の質的獲得という観点からも、格好の教材となる。「人恋しさ」の価値と統合されて、教材透視力に応えてくれる。

ただし、形容詞語彙が多用されることのみが、右の要求に応える唯一の条件ではない。私たちは、さきに、井伏鱒二の『おふくろ』においても、数少ないからこそ、かえって質的に重い価値を担った形容詞を入り口に、語彙習得の奥処に参入することができた。また、井伏鱒二の淡々とした母への思いの表現を、自らの表現語彙としての形容詞で表現し直してみる。形容詞語彙の表現力のある意味での壁が、井伏鱒二の表現から逆照射もされた。

さて、太宰治の『津軽』五つの場面とは、次の箇所である。いずれもが、独立性を持つ。

Ⓐ バスはかなりこんでいた。～十三湖を過ぎると、まもなく日本海の海岸に出る。

Ⓑ 教えられたとおりに行くと、～おとぎ話の主人公にわたしはなったような気がした。

Ⓒ 帰ろう。～しっかりせんかい。

Ⓓ 「あらあ。」それだけだった。～倫理ではなかった。

Ⓔ 「久しぶりだなあ。～よく来たなあ。」

右の五つの場面は、それぞれに、価値と一体となった文体の凝

〈表 3〉

〈三つの作品の形容詞語彙の比較〉

『津軽』の形容詞語彙	
ない	19
いい（よい）	16
赤い	4
ありがたい	4
痛い	4
小さい	3
強い	3
悪い	3
同じ	2
悲しい	2
軽い	2
近い	2
長い	2
ひどい	2
よそよそしい、恨めしい、激しい、荒い、優しい、白い、浅い、はかない、広い、いけない、固い、美しい、明るい、大きい、難しい、きざったらしい、たまらない、汚い、ふさわしい、女々しい、情ない、だらしない、汚らしい、いやしい、冷たい、遠い、偉い、丸い、	

→

さりげない、高い、甘い、幼い、若い、薄い、新しい、おろかしい、深い、うれしい、愛ごい、各1	

『おふくろ』の形容詞語彙	
ない	12
よい	7
多い	3
悪い	3
同じ	2
早い	2
若い	2
古い、みっともない、低い、遠い、つまらない、短い、うまい、平たい、各1	

『網走まで』の形容詞語彙	
ない	12
よい（よし、いい）	11
（お）悪い	4
暑い	3
おとなしい	3
気むずかしい	3
遠い	3
ありがたい	2
白い	2
近い	2
（手）早い	2
ひどい、繁し、赤い、少ない、恐ろしい、痛い、悲しい、同じ、不平らしい、おいい、小さい、まもない、涼しい、軽い、うるさい、眠い、青い、多い、きたない、弱い、古い、暗い、各1	

〈比　　較〉	種類	延	文章の長さ
太宰　治『津　　軽』	53	107	100.0
志賀直哉『網走まで』	33 (36)	69 (73)	68.5 (100.0)
井伏鱒二『おふくろ』	15 (30)	39 (60)	56.6 (100.0)

注（ ）は、「文章の長さ」を100に換算。

縮された箇所である。私は、さきに全体を範読した中で、とりわけてこの五箇所の読み分けに腐心した。教材『津軽』は、その意味でも、私にいっそうの教材透視力を要求してやまない。私は、改めて、その思いを力に込めて、五つの場面を範読し分け、学習者へも、それを越えた朗読の工夫を求める。語彙は、その中で、再認識される。

たとえば、Ⓐで、主人公は、小泊への道行での万感の思いを、十三湖に重ねて、それを「はかない」の一語に集約する。私たちは、この形容詞を、「理解語彙」としても「表現語彙」としても、すでに習得していると言えるか。習得しているとは、どういうことなのか。「あとかたもなく消えやすい。」と言い変えてみるか。その上で、国語辞典のいくつかの説明と、厳密に比較してみる。一般的な意味の範囲で、私たちは、揺れ、とまどう。

この事実は、「理解」の側面からすると、ことばの機能が、伝達止まりであり、Ⓐを対象にした私たちを、認識や思考の次元で満足させないことを意味する。さらには、「表現」の側面からすると、それを踏まえた上での独自の内実を想像し「表現」するに耐えられないでいることをも意味する。私たちは、さきの比較が生んだとまどいに結着をつける道を、まぎれもないAそのもの（ひいては、『津軽』全体）の中へと、探し求めなければならない。

一方、私の主題単元学習は、言語技能に関る面を入り口としながらも、終には、価値に及ぼうとする。言語を、技能止まりの伝達機能においてのみ習得するを、よしとはしない。価値は、言語を、認識、思考から、創造の機能へと活かさねばならない。そこに、学習者と私との〈表現〉活動が、軸となる。「語彙を豊かにする」ねらいは、このような「主題単元学習」活動の中でこそ、初めて、「質」としての「系統性」へのとば口に立つ。

すなわち、「語彙を豊かにする学習」は、右の「主題単元学習」の実践を、言語の学習としての側面から、よりいっそう具体化する道である。語の単位は、二つの面を持つ。一つは、文脈の中での意味と機能であり、もう一つは、国語体系において有機的なつながりをもつ、他の語との比較に認識される、意味と機能である。同時に、前者は、後者の、作者（筆者）における縮図として、二重構造をも示す。語彙は、この動態のなかで豊かになる。

たとえば、Ⓐにおけるさきの形容詞「はかない」は、小泊のたけさんを求める旅の心象風景としての十三湖を表現する語として、文脈の中に活かされている。また、それは、たとえば、類義語に限っても、「あえない」「あっけない」、あるいは、「束の間」「無常」などとどう比較されるか。同時に、Ⓐの文（文章）脈中の「悪い」「激しい」「荒い」「ない」「優しい」「浅い」「ない」「広い」との有機的構造のなかでこそ、支えられている。

本単元では、教材を透視する中で、「彙」のねらいどころを形容詞に置いた。年間学習計画の体系も、主題とそれを伐り拓く教材（学習材）との関りで、(1) 複合動詞と名詞 (2) 形容詞(3) 副詞 (4) 動詞 (5) 接続詞と、品詞論に委ねた。主として、古典学習における「文法」学習を念頭に置いたものである。しか

し、右に述べてきた理念と実践から帰納される「体系」は、学習の実の場（〈表現〉活動を軸とする）をこそ、母体とする。

三

第九時、一〇時の小主題は、「人恋しさには、どんな語彙が関っているのか。―場面の中での系統性を考える。―」である。初めて、「系統性」を目指す。(1) 選んだ場面の一つの形容詞の一般的な意味を、記入する。(2) 場面で、その形容詞を支えている五つの語を選び抜き、用紙の［語①～⑤］にまず記入し、それぞれの一般的な意味を調べ、記入する。(3) ①～⑤の語のここでの意味を、場面にふさわしい形で説明する。（用紙例照）

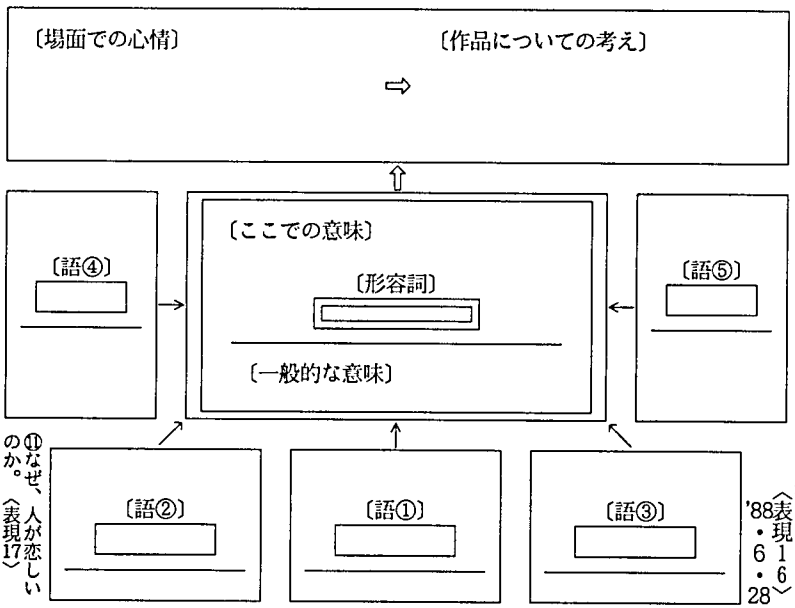
〈Aさんの表現16〉場面Ⓐ

(1) はかない　しっかりしたところがなくて、たよりにならない様。あっけなくむなしい様。無常。

(2) ① 孤独　ひとりぼっち。たすけのないこと。② ひっそり。（湖が）静かである。③ 無関係　関係がないこと。関係しないこと。④ 水たまり　水がたまっているところ。⑤ 冷える。温度が下がる。

(3) ① 湖が一つさびしくあるという表現に使われている。② 湖が静かであるのではなく、人がいなく静かである。③ 湖が人間と離れている。自然のまま。④ この文では、小さな水のたまったところ。例えば雨あがりにでもできるもの。（湖の水たまりの様なちっぽけなものにしている。はかないものにして

〈用紙例〉



⑨・⑩形容詞の意味を深める。〈表現16〉'88・6・28

⑪なぜ、人が恋しいのか。〈表現17〉

いる。）⑤ 温度のことではなく、湖が一つさびしくという表現のために使われている。

《B君の表現16》場面Ⓐ

(1) はかない 将来確実にどうなるという目あてがない。

(2) ① 展開 目を見張るような場面が示されること。停滞なく、次つぎに新しい思考や運動を進めること。間隔をとって広がること。② 盛る 山の形につみ上げる。茶わんなどの入れ物に入れる。薬を飲ませる。③ ひっそり 静かで誰も居ないように感じられる様子。④ 孤独 周囲にたよりになる相手が居ないで、ひとりぼっちであること。⑤ 水たまり 雨水などが溜っている所。

(3) ① 十三湖が自分の目にとても大きく見えてくる。② 十三湖の水をその土地に水が入っているようにいっている。③ 十三湖には何にもなく静けさだけが漂ってくる。④ 十三湖には何もなく、ぽつりさみしく存在している。⑤ 十三湖が広くても静かすぎるので、十三湖を比ゆ的に表現している。

《A君の表現16》場面Ⓕ

(1) 愛ごい 「かわいい」の方言。子供らしさ、美しさなどで人をほほえませるような状態にある。愛らしい。

(2) ① とっくと「じっと」の方言。からだ視線を動かさないさま。② 悲しい 心が痛んで泣けてくるような気持。（↔うれしい）③ ありがたい 感謝の気持をいだくさま。かたじけない。④ うれしい満足する、または元気づけられることがあって楽しく、喜ばしい。（↔悲しい）⑤ 夢 実現が困難な空想的な願い。将来は実現させたい願い。

(3) ① 幼い頃の主人公が、たけの口から出る昔噺に不思議そうに聞いている様子が伺われる。また、一口々々食べさすのに手間はかかったけど、たけは、主人公を非常に愛していることがわかる。② （空白）③ 三十年もの間ずっと待っていたたことから、たけの主人公に対する愛の深さがよくわかる。願いがかなったことで自然に出た言葉。④ 「ありがたい」とほぼ同意。三十年来の願いがかなって出た素直な気持。⑤ たけは心から主人公を愛している。三十年前、自分が世話した主人公に今一度会うことを夢にまでえがいていたのだから。

《D君の表現16》場面Ⓒ

(1) いやしい 社会的地位が低い。りっぱな人間としてつきあうことがためらわれる状態だ。物のとらえ方や趣味が洗練されていない。欲望を隠し慎むことができない状態だ。

(2) ① 腹だしい 腹が立つ様子だ。いらいらして、今にも怒り出したい感じだ。② 悪い 道徳的に責められる様子だ。好ましくない状態だ。標準より劣っている状態だ。正常な働きを失っている様子だ。③ 女々しい いくじが無くてまるで女のようだ。④ だらしない きちんとした所が無い様子だ。あんまり弱すぎることをあざける言葉。⑤ 汚らしい いかにも汚なく見える感じだ。

(4) ① 前の文章には「たけなんかどうでもいいような」と書いているけど、本当はたけに会いたい気持が逆に反動となって腹が立ってしまった。② 「悪い」という形容詞が2回も使われ

ている。ということは、自分は何もかもが悪いと思っている。③この女々しいという、女性の様な性格を持ったところがあるかもしれないけど、それより、じめじめした性格、暗い性格という意味がこめられていると思う。④ たけに会いに行くというきちんとした目的を持ってきたのだけれど、会えないような気がして、自分の気持があやふやになりはっきりしない状態だ。⑤ たけに会えなくて、今までの自分に対する気持が、とても汚らしく、考えが甘いのだろうと自分を責めている。

このように、さきの理念を、学習活動の場に具体化する。学習者は、自らの朗読の反復のなかで「表現読み」を独自に磨いたうえで、その中の一つの形容詞を、「印象語」として確認する。この二時間の学習では、それが、文脈（場面）の中で、他のどのような語に支えられて、独自の意味を担っているかが、一般的意味との比較の中で、確かめられていく。つまり、一語は、作品（場面）世界のなかでの「彙」で把えられ、系統性をも帯びている。

四

第一一時の小主題は、「語彙は、どのように豊かになったか。―語彙に支えられた一つの形容詞の価値を、確かめる。―」である。これは、本単元の学習者と私との学習評価につながる。

(1) 一つの形容詞のその場面での意味を、深める。(2) その場面でのかかわる人物の心情を説明する。(3) 小説『津軽』についての考えを、まとめる。（以上〈表現17〉）(4) A グループ学習で得たことと、B「形容詞一つ」を入り口にする学習で考えたことを、省みてまとめる。（以上〈表現18〉）（用紙例参照）

《Aさんの表現17・18》場面Ⓐ、形容詞「はかない」

(1) はかないという言葉は、この文の中では湖が一つ孤独に人間と無関係に存在していることを、表現している。作者ははかないという言葉を普通なら人間の心情に使う場合が多いのに、風景表現に使用している。すばらしいことだと思う。

(2) 下で説明した「はかない」は、湖がはかないということを表している。ではこの場面でなぜ作者が、湖を「はかない」「水たまり」「ひっそり」「孤独」「無関係」「冷える」などを使用するのかは、作者の心が「はかない」「水たまり」「ひっそり」「孤独」「無関係」「冷える」だからであるのではないでしょうか？

(3) この作品の主人公は、こしのたけをさがし求めているが、さがし求めている心の中に、「さびしさ、不安……」の様なものがある。湖がはかなく見えたのが、私がそう思う理由である。他の文中に、作者が途中で、自分をいやしく思い、帰ろうとしている。会いたいのだが、たけとの間に何か大きい壁が、作者の目の前にあった様に思う。

(4) A 友達は「甘い」という形容詞を選んでいましたが、私と全く反対の形容詞で、「甘い」の使用されている文は、作者がたけと出会い安心しきっている。しかし、私の「はかない」という形容詞の文は、たけと出会っていなく不安でいっぱいという全く反対の気持を表している。よって作者の心情が途中で変

化したことをつかめた。B　一つの形容詞を㋒じっくりとにらむことによって、文を深く読みとることができた。例えば、私は、「はかない」という形容詞をじっくりとにらんで文を読みとりましたが、これによって、本当にはかないのが何だったかが理解できました。形容詞の使い方を多く学べました。

〈私のひと言〉　㋑に、あなたの勉強の成果が、よく表われています。仲間の豊かで鋭い読みとりに学んで、作品がつかめたのですね。㋺の大切さがよくわかりましたね。どのことばも、どのことばもが、このような読み手の努力を求めているのですね。

《B君の表現17・18》　場面Ⓐ・形容詞「はかない」

(1)　ただ水があるというだけで見すぼらしい。

(2)　全く新しい土地なので、外の景色に目がいく。そこで、目的地に近ずいていくうちに、人間関係がある自分と全く無い草木などの風景を見比べて大きな差があると感じ、少しでも関係がある作者は、喜びにひたっている。

(3)　作者は、なつかしい人に会うために、うれしい気分であるが、ふと、他の物（風景）を見てさまざまな、今の自分とちがった思いがはりめぐらされた。

(4)　A　自分と同じシーンを読んでいる人でも自分とは違った考えがあったり、自分よりも上手だなあと思えるような表現をしていて、一つのことにもさまざまな考え方、表現があるのだなあと思った。B　形容詞一つでも一般的な意味がたくさんあったり、また一つの意味でも多くの形容詞にあてはまり、形容詞のことば一つのもつ力の大きさがわかった。

〈私のひと言〉　さまざまな考えがぶっかり合うことによって、お互いが、それぞれ一歩深まることが大切なのですね。そういう意味で、私たちの心の中の「人恋しさ」も、大切にしたいものですね。ことばの力についても、深く考えることができましたね。

《C君の表現17・18》　場面Ⓔ・形容詞「愛ごい」

(1)　幼かったころの主人公の思い出と長い間の夢が、怒濤のように押しよせてきたのだと思う。たけは主人公が大人になった今でも、まだ主人公のことを思っている。

(2)　たけの三十年来の凝縮された思いが、ぱっとはじけて急にあふれ出たと思う。たけばかりが話しているが、主人公はしみじみ聞いているのだと思う。かなり長い一文になっているが、これがたけの精一杯の愛情表現であるのだと思う。

(3)　「おふくろ」（井伏鱒二）にも似ているが、また少しちがう親子の愛情表現。素朴だが深い愛情。

(4)　A　たいていの人が三十年ぶりに会えたたけとの「甘い放心の憩い」の所をとりあげて「安堵感」「無風無憂」などを甘子にしていた。僕は、たけの主人公に対する思いの所をとりあげたが、ここは主人公のたけに対する考えなどが述べられている。B　一つ一つはなんでもない「形容詞」だが、読み深めると意外と多くのかぎをにぎっていると思った。

〈私のひと言〉　ちがった場面をとりあげていても、同じ主人公「私」の心を求めて深く読んだ点では、同じですよね。そこから、どんな読みとり方が出てきて、教えられましたか。一見

「なんでもない」ものが、大事な価値への鍵をにぎっていることがわかりましたね。大事な発見でしたよ。

語彙に支えられた一つの形容詞の価値は、学び合いの中で、このように確かめられた。主題に即した「彙」の系統性が、自覚される。

おわりに

主題単元「なぜ、人が恋しいのか。」の展開の中で、語彙を豊かにする学習を、このたびは、「彙」の「系統性」を「質」として目指すことに努めてきた。それは、どう評価されるか。学習者の〈表現18〉のBに、聴きひたりたい。

① まず、形容詞一つで人間の心を表わすということは、むりなんだと思った。人間の心は、複雑すぎて、言葉で表わすのは、むずかしい。また、この作品を読むにあたって、Ⓐの場面の「はかない」によって、作者の気持が、少しはっきりしたように思う。名詞で読み深めるよりは、わかりやすかった。

② 形容詞とは、名詞を修飾したりするだけだと思っていたが、そうではなかった。文章全体を形容詞一つで表せないが、場合場合において形容詞は、多くのこと表わせることがわかってきた。

③ 今までは、たくさんの形容詞がそれぞれ別に意味をもっているのだと思っていたが、みなそれぞれ何らかの関係をもっているのだなあと思った。

④ 今まで、本を読む時に、形容詞など気にして読んだことはなかったけれど、「形容詞ひとつを入り口に」という読み方をしてみると、数も結構多くて、文の中で重要な働きをしている語だと思いました。

⑤ 本当に、たった一つの「形容詞」というものが、こうまでも人の気持をあらわすものだとは、今まで気づかなかった。これからも、もっと「形容詞」に注意していけば、作者の心情などがより明らかになるものと思う。

⑥ 形容詞の意味は、辞書を使えばてきとうにのっています。でもその意味は誰か人間が作り出した者なのだから、絶対だなんて誰も言えないと思います。だから、小説などにのっている形容詞の意味をわかろうとするのなら、その筆者や登場人物の心情をつかんで、はじめて生れてくるものだと、これまでに勉強して思いました。

⑦ 一つの形容詞に、これほどたくさんの意味があり、またそのことばに、近い形容詞も、本当に数限りなくあることがわかった。しかし、たくさんあるからといって、どれでも使っていいということはない。きちんと意味を理解して、使わなければ、大変な、ことになると思うからです。

⑧ 難しい。周囲の影響をうけて、一つの形容詞の意味が、微妙に変わってくるところが、難しいがおもしろい。文というものが、品詞一つで変わっていくところがわかって、よかった。また、単に教えてもらうのではなく、自分で考えるというところがよかった。

⑨ 初めは、わけわからず、〃何なんだ。〃と思ってました。すごく難かしかった。〃形容詞から心情なんて、わからない、〃って。でも、津軽の時はちがってると思った。その語の中には、いろんな意味がつまってると思った。こんな授業は、初めてだから、初めはとまどったけど、おもしろい読み方だと思った。

導かれて、学習体系の確立を目指したい。

注1　野地潤家先生「語句・語彙指導の課題と方法―語句・語彙学習史の事例を中心に―」（明治図書「国語科教育学研究」6所収）

2　拙稿「語彙を豊かにする主題単元学習の展開（一）―『青春は、ことばをどう輝かすか。』の場合―」（「国語教育攷」第四号所収）

3　拙著『高等学校　私の国語教室―主題単元学習の構築―』（右文書院「国語教え方叢書」別巻六）

4　野地潤家先生『国語教材の探究』（共文社）

（一九八九・三・二九記）

（大阪府立池田高等学校教諭）